

30年ぶりの便り



広島市立白島小学校長 藤田 雅 幸

今年の1月下旬に1通の分厚い封書が届いた。東京都に住むM子からの便りである。昨年末のクラス会に30年ぶりで出席したかったが、果たせず残念であったというおわびと、アルバムやサイン帳を展げて懐かしい思い出に浸ったという書き出しだった。さらに、事情あって上京し就職、結婚した経過や家族の状況、両親の様子などがこと細かに数枚の便せんに流麗な文章でしたためられていた。

別れて30年という歳月の歩みを私に伝えたという強い衝動が、一気に彼女の筆を走らせたものであろう。読むうちに、優しい主人や大学生と高校生の娘と息子に囲まれ、充足した家庭生活の中で生きがいと幸福感に包まれた彼女の笑顔が目に見えようであった。「良かった、良かった」と、わがことのように嬉しさがこみ上げてくるのを押さえ切れなかった。次回と同窓会には是非とも出席したいとのことで再会が楽しみである。

毎年正月には、教え子たちからの便りを手にすることが、とりわけ楽しみである。思えば20代から30代の若い頃に受け持った子供

たちである。彼らもすでに40歳を過ぎた人生にさしかかり、社会の中堅的存在となっている。数行の短い文章の中に、仕事のこと、家庭や子育てのことなど、生活の実感がにじみ出ているように思われる。その中で、しばしば、ハッと胸をつかれることがある。無邪気な小学生であったはずの彼らに、当時の私自身の行動や見方、考え方が、今も強く作用しているという事実である。

当然といえば当然のことかもしれない。今更ながら、生活を共にするなかでの人間的ふれあいによる影響の重さに驚かされる。指導技術の未熟であった学級担任の頃は、クラスの子供がかわいくて、ただがむしゃらに取り組んだものである。しかし、「自分の育てたこの子たちが成人の暁には、きっと堅実な人間として日本のため、社会のために役立ってくれる」という自負だけは忘れなかったつもりである。そのことが、今となっては、せめてもの慰めであるかも知れない。

教え子に無意識の間に与える教師のインパクトの重大さを、あらためて考えさせられるこの頃である。

みんなで成長していく学級をめざして

広島市立神崎小学校教諭 塘 文子

一人ひとりの児童が自分の思いをみんなに言え、そして互いに励まし合いながら活動することによって個々の児童が成長し、また学級集団としても向上していく学級づくりをめざしている。そのためには、好ましい人間関係を育て、仲間と共に伸びようとする意欲を高めていく指導が大切であると考えます。

個を成長させるために

1学期当初、個々の児童の現状及び生活背景を調査し、児童理解に努め、その上で児童の指導目標を設定した。そのことで児童自身も自己評価し、自分で生活目標をもちはじめた。また学級でも、学級目標、班目標を話し合わせ、実践させた。それが、学級の一員としての自覚と自主的活動につながっていった。友だち関係を広げ、深めるために

児童が辛直に意見を主張し、ぶつかり合いながら、互いに認め合える小集団活動をおこなう仲間意識を高めたい。この場合、望ましい小集団を育てるために、その都度助言、賞揚を有るな取り組みの評価をした。また、話し合いを学級全体に広げ、みんなの意見で学級の仕事を計画し、実施する。これによって自主的活動を行う児童の活動意欲を高めた。

学話し合い制の導入、目標、児童相互のかわり合いの支援など、人間関係も深まってきた。話し合いがより充実するには、お互いの協力が必要であり、一人ひとりのやる気が大切となる。話し合い、実践、反省を繰り返しながら、全員がやる気を出して協力することによって、冬にはみんなで成長していく豊かな学級集団づくりをめざしている。



豊かな人間関係を育てる学級経営

生徒を理解するために

広島市立古田中学校教諭 平岡 恵子

クラス分けの発表後、生徒は仲のよい友だちと一しょになっていれば「やった」と喜ぶが、担任ともなれば40人前後の生徒全員が相手であるから大変である。

生徒と同じ目の高さで

1～2年間、どのように学級経営していくかを方向づけるためには、生徒一人ひとりをよく知ることが大切である。そのためにはまず、一人ひとりがどのように動き、どのように集団に働きかけ、あるいはどのように働きかけられているかをよく見ることである。そして、生徒との対話の時間をできるだけたくさんもつことである。特に、生徒と話をする時には、生徒の目の高さまで下りて話を聞くことが大切だと思う。意外にこういう時に担任の知らないクラスの顔、生徒の顔が見えた

りやすく、自分の指導の不足分さに気づくこともある。

時には教師という仮面を脱いで

中学生位の年齢は、この人には本音を吐いてもよいかどうかを覗き分ける本能的なものがある。教師という自覚を持ちつつ、時には教師という仮面を脱いだらどうか、本音かかわり、教師と私的に話し合える雰囲気をつくれば指導も受け入れやすいと思う。何か問題が起きてから生徒の心の中に入ろうとしてもなかなか困難である。たまたお互い立場が違うので、お互いに理解することは無理である。その理解しきれない部分を共に悩みなから、お互いに関心を持ち続けることが大切である。その悩みの中で教師としても成長できるような気がする。

研修講座スナップ

夏に学ぶ

～中期分（7月下旬～8月）研修講座より～



▲幼稚園教育実技講座

はねて歌ってリズム遊び



▲障害児教育実技講座

教材づくりにチャレンジ



▲小学校国語科書写実技講座

一画一画に集中して

—中期分研修参加者数—

延べ 4,816名



▲小学校家庭科実技講座

さあ、みんなで試食を



▲教育課題研修講座

真剣なまなざし、登校拒否解決への道

受講者の声

学校同和教育講座を受講して

2日間共、内容的に大変充実していたと思います。講師の先生も吉和事件がなぜ同和教育の原点なのかよくわかるように話されました。理論と実践がうまくかみ合っていて、同和教育のすじみちがよくわかりました。地域は違っても何らかの形で、自分の学校の実践に生かせるのではないかと思います。

教育研究紹介

「聞くこと・話すこと」の英語運用能力の育成をめざした
効果的なチーム・ティーチングに関する調査研究

広島市教育センター指導主事 福原 紘治郎

本研究は「聞くこと・話すこと」の英語運用能力を育成する学習指導を進めるに当たって、日本人英語教師（以下JET）と英語指導主事助手（現在は英語指導助手、以下AET）との効果的なチーム・ティーチング（以下T-T）の在り方について考察したものである。

T-Tは、英語の実際使用場面を教室の中にそっくり移入させたもので、生徒にとっては「生きた英語」に接する貴重な時間であり、英語による意思伝達の喜びを味わう楽しい時間となりうる。一方、JETにとっては自分の学習指導法を見直し、英語運用能力に磨きをかける時間でもある。

ところで、外国人英語教員招致事業も本年度からその内容を一新し、昨年度の約2.6倍の848名のAETを招聘している。今後、この人数枠は拡大されると予想され、T-Tも含めてAETの活用がこれからの英語教育における重要な課題のひとつとなろう。

ここでは、T-Tを効果的な授業形態とするためにJETが留意すべき点について、研究内容に基づいて述べてみたい。

教室英語と英語的環境

教室の中に英語の雰囲気をつくり、生徒が英語を聞いたり話したりすることに慣れるために、JETは日頃から授業中に英語を出来るだけ使用するように努める。

「聞くこと・話すこと」への肯定的態度

T-Tは主に「聞くこと・話すこと」の英語運用能力の育成をめざしているので、この領域に対する価値観や肯定的な態度がJETの中に養われていなければならない。もしそうでないと、T-Tは「特別な」「ムダな」授業として敬遠されるであろう。

JETの指導性と英語運用能力

JETは自己の指導方針に基づいてAETを活用しているという主体性を失ってはならない。指導性を発揮するためには、JETの確かな英語運用能力が必要なことはいうまでもない。

指導目標と使用教材

AETは場当たりの活用でなく、指導目標や指導内容に応じて計画的に活用されるべきである。

T-Tの目標を動機づけのような情意面におくか、言語材料の定着を図る等の認知面におくかによって使用教材を考慮すべきである。

事前準備と事後評価

指導目標、使用教材、生徒の実態、T-Tにおける役割分担等の打ち合わせを十分に行う。

また授業終了後、相互の信頼関係に基づいて率直な意見交換を行い、次回のT-Tに生かせる授業評価を行う。

AETとの人間関係

事前の打ち合わせ、クラブ活動、研修会等で相互が意見を出し合う過程で人間的なつながりが生まれ、T-Tに必要な協調性が養われていくと思える。

文化大使としての活用

言語の育まれた歴史、文化を理解することは、言語習得のうえで重要である。AETはまさに生きた英語文化圏であり、一斉音読のための範読だけでなく、学習内容に関連した文化的な情報提供者としても活用すべきである。

以上、いくつかの留意点について述べたが、何よりも大切なのは、JETのT-Tに対する積極的・主体的な取り組み姿勢である。

広島市教育センター『研究紀要』第7号
(昭和62年5月発行) 参照

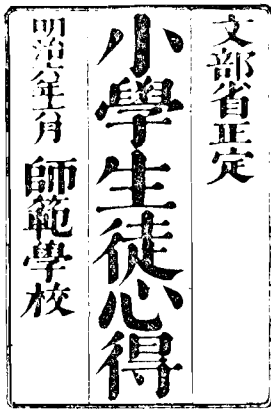
小学生徒心得

広島市教育センター指導主事 松田了二

飯室小学校は、明治初年には尚先舎といわれていた。その尚先舎の沿革誌を見ていると、文部省正定・東京師範学校編集刊行の「小学生徒心得」が毛筆で転写されていた。

この「小学生徒心得」は、学制発布の翌年の明治6年6月に

刊行されたもので、品（ぶ）に不学の用なく家に不学の人なからしめよ（学制の被仰出書）として始まった尚先舎などの学校の小学生徒に対し、学校生活全般におたる行動や態度の基準を示したものであった。



東京師範学校の生徒心得は、掟（おきて）形式の17か条の心得からなり、この種のものとしては、わが国最初のものであった。しかも、この心得を尚先舎がいくこ入手し、どのようにして生徒に示したかは定かでない。

近代学校教育制度が始まったばかりのこの時期には、このような心得が必要だったのである。その後、この心得をもとに、各府県や民間人によって同じような趣旨の小学生徒心得が刊行されている。

広島県においても、明治16年、学務課制定の30か条からなる「小学生徒心得」が刊行されている。この心得を大事に保存していたお年寄りも、「覚えてしまうくらいに、何回も何回も読まされたものよ」と語っていた。

以下、尚先舎の沿革誌の「小学生徒心得」から、いくつかを抜粋して掲載する。

第1条 毎朝早く起キ顔ト手ヲ洗ヒ口ヲ漱ギ髪ヲ搔キ父母ニ礼ヲ述ベ朝食終レバ学校へ出ル用意ヲナシ先ツ筆紙書物等ヲ取揃ヘ置キテ取落シナキ様致ス可シ

但シ出ル時ト帰りタル時ニハ必ス父母へ挨拶ヲ為ス可シ

第4条 席ニ着キテハ他念ナク教師ノ教ヘ方ヲ伺ヒ居、仮リニモ外見雑談等ヲ為ス可ラス

第7条 若シ授業ノ時限ニ後レ參校スル時ハ猥リニ教場ニ至ル可カラズ遅刻ノ事情ヲ述ベテ教師ノ指図ヲ待ツ可キ事

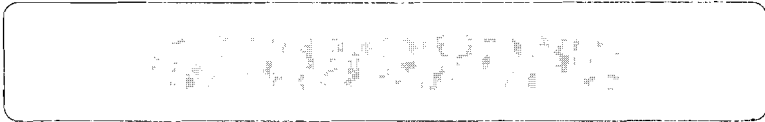
第8条 出入ノ時障子襖等ノ開閉ヲ静カニス可シ書物ノ取扱方ハ成丈ケ丁寧ニシテ被損セザル様ニス可シ

第17条 途中ニテ遊び無用ノ場所ニ立ツ可カラズ無益ノ物ヲ見ル可カラズ疾ク走ル可カラズ若シ馬車等ニ逢フコトアラバ早く傍ニ避ケテ馬車等ノ妨ニナラズ自身モ怪我ナキ様ニス可シ



明治16年8月刊行

広島県制定「小学生徒心得」



- * 講師 児童文学者
岩崎京子先生
代表作「かさこじぞう」「さぎ」等
- * 演題 「子どもの可能性」
- * 日時 昭和62年12月3日(木)14:30～
- * 場所 広島市安佐南区民文化センター
- * 対象 教職員、社会教育関係職員

教育センターでは教育研究をすすめるに当たって、次の方々には研究協力員をお願いしています。

研究協力員氏名

研究領域	研究協力員氏名	所属校(園)名
学級経営	渡辺 椋彦 広兼明 中山和弘 佛圓修 叶叶城 行廣秀 河田慎 竹内章 中西博	安小学校 美鈴が丘小学校 山田小学校 天満小学校 千田小学校 比治山小学校 鈴張小学校 落合東小学校 山本小学校
生徒指導	大下 純三 市川昭 香川豊 盛藤かす 藤本俊 末井承 幾友孝 久田三 三村和 久裕	戸坂中学校 落合中学校 安西中学校 祇園東中学校 五日市中学校 似島学園中学校 基町高等学校 沼田高等学校 広島商業高等学校
幼稚園教育	高木 浄美	川内幼稚園
理科教育	竹本 康明 都甲 誠嗣	安佐中学校 亀崎中学校
図画工作科教育	安藤 典子 平泉 若江	鈴が峰小学校 長束小学校
国語科教育	植木 一郎	安西中学校
障害児教育	藤 弘幸子	広島養護学校

表紙絵 広島市立翠町中学校長 前田 典生
～平和記念公園 嵐の中の母子像～
題 字 広島市立牛田新町小学校長 安田 壮

本年度も市立学校等の先生方の作品に加えて、市立小学校児童の作品を展示させていただきました。



今年度後期は次の6名の先生方が、それぞれの専門分野で研修を進めておられます。

- * 国語科教育：土橋幸正教諭 (吉島東小)
研修題目：確かな書写力を育成する毛筆書写指導法の研究
- * 数学科教育：吉岡正憲教諭 (国泰寺中)
研修題目：自力解決の場を取り入れた数学科指導の在り方の研究
- * 理科教育：戎真司教諭 (古市小)
研修題目：問題意識を高める理科指導法の研究
- * 道徳教育：吉竹邦明教諭 (山本小)
研修題目：価値の主體的自覚を促す道徳の時間の指導過程に関する研究
- * 生徒指導：新川和博教諭 (祇園東中)
研修題目：学級所属感をたかめるためのリーダー育成についての研究
- * 教育相談：白土俊介教諭 (尾長小)
研修題目：望ましい人間関係を育てる教育相談の在り方に関する研究

編集後記

秋も深まってまいりました。芸術の秋、スポーツの秋……、いろいろとお忙しいことでしょう。本年度2回目の所報をお届けします。御活用を願っています。